

緊急事態宣言が解除され、一時収まったかに見えたコロナ禍ですが、社会活動の制限の緩和に伴って感染者の数が再び増えていきます。しかし、無症状の陽性者が多いのこの感染症の特徴です。

PCR検査の件数が増えれば、陽性者数も増えるのは当然です。感染した人の数に一喜一憂するのではなく、重症者、死亡者の数をより重視する必要がありますと思います。

死亡者は全国的にほとんど増えていません。感染者、死者とも全国の3分の1を占める東京都でも、7月に入って死者数はゼロが続きました。重症者の数は全国的に見ても、東京都に限っても減少傾向にあります。

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

コロナも強敵 がんも強敵

年は、ウイルス感染症による死亡が例年より少ない年になるかもしれません。

がんは流行性の感染症とちがい、高齢化とともに、増え続けていきます。新型コロナウイルス感染症にばかり関心が集中すると、バランスを欠くこととなります。

男性で1割以上、女性では2割近く増加すると見込まれています。

私もその1人ですが、過去5年以内にかんと診断されて生存している「有病者」については、現在、男性約173万人、女性約140万人、男女合わせて313万人とされています。しかし、35〜39年の平均では、男性は184万人、女性は167万人と推計され、有病数は男性で6%、女性では19%も増加する見込みです。

マスクの着用や手洗いをする人が増えたためと思います

397万人で、前年同期の4割弱です。

00人ほどがんと診断されています。そして、国立がん

新型コロナウイルスを甘く見てはなりません。しかし、

が、インフルエンザの患者数は激減しています。厚生労働省の推計によると、3月1日

ノロウイルス等による感染性胃腸炎もインフルエンザと同様に、例年よりずっと減っています。皮肉なことに、今

研究センターの長期予測によると、2035〜39年の平均では、男性は64万人、女性は53万人と推計されています。

がんという、まだまだ高くて厚い壁の存在を忘れてはなりません。

(東京大学病院准教授)